とが出来ず，最後には〝植村さんはもっと厳しい人かと思っていた〟と答えにならない答えをして逃げた。このことに対し出席者の一人から伊藤氏は答えをはぐらかして逃げている，植村氏に真面目に答えるべきである，と厳しい批判がなされた。このような不真面目な元保護部長に指導されている行政は哀れだし，空から農薬をまかれるわれわれ住民にとっては同氏の指導は迷惑だ。

松枯れの原因に関連して，マツノマダラカミキリやマツノザイセンチュウの異常増加原因について討論された。石原氏は，主に環境破壊すなわち林野庁の皆伐政策による天然林の喪失と，農薬使用による生態系のバランスの崩れ（天敵の減少）に原因があると主張した。一方西口，森本両氏は，動物の増殖量は食餌量によって決定されるとの考えから，カミキリやセンチュウの増加はこれら食餌すなわち松の枯損木の林内放置に原因すると反論し，両者の意見は一致しなかった。

何でも彼でも松は守らなければならないと思われているふしもあるが，どうしてもそこに松の緑が存在しなければならないかどうか，松の生態学的，経済的，歴史・文化的価値などいろんな面から松の価値をもう少し冷静に厳しく検討し直してみる必要がある，また，松林を徹底的にいつまでも薬漬けにしておけば松枯れを防止できるかも知れない，しかしそれはあまりにも危険で実施不能である，というのが出席者の大方に共通した見解であった。

私は前半の見解には賛成するが後半については疑問を持つ。枯れた松にマツノマダラカミキリが巣食っている，ザイセンチュウも発見されるとカミキリ，センチュウ説支持者は云うが，松林が自然である以上カミキリがいてもセンチュウがいても何も不思議なことではない。カミキリ，センチュウ説を是認するとしても，問題は何故異常に発生したのかである。何かの原因で自然のバランスがくずれたからだ。そのバランスのくずれを薬剤で修復できるなどとは私には思えない。

農薬漬けでマツノマダラカミキリもマツノザイセンチュウも撲滅されるかも知れないが，それと同時に松林は益々松も生育できない環境・生態に変貌してしまうであろう。効果の疑わしい薬をあわててまく必要はない。いま，研究者がやるべきことは，1968年からの国立林試を中心にして始まった松枯れに対する共同研究で，昆虫，線虫，樹病，樹木生理，造林，土壌，森林気象など各分野の研究者が白紙の状態で取り組んだように，なぜ松が弱ったのか，水は，空気は，土は変化していないのか，カミキリ・ザイセンチュウが原因だとしてもカミキリ・ザイセンチュウがなぜ増えたのか，ザイセンチュウは本当にカミキリだけを介して移動するのか，など松枯れの原因をもう一度虚心になって追求してみることではないかと思った。それが真の松枯れ防除への最も近道であり，将来も発生するかも知れない他の樹林の枯損の防止につながる道ではなかろうか。

（1980.7.28）

「松くい虫防除」に関する最近の動きや意見についての投稿をどなたかにお願いしたいと考え，依頼していたところ，「市民の会」の植村さんが，「自然を返せ！関西市民連合」の会誌に掲載するための原稿を書いておられる事を知りました。自然連合および植村さんと相談のうえ，読者がほとんど重複していないため，本誌にも同時に掲載させていただくことにしました。御好意に感謝いたします。

（編集委員会）

会務報告

1．シンポジウム報告

11月30日大阪市立自然史博物館集会室において，「松枯れシンポジウム」が開催されました。前回にくらべ，シンポジウムに関心を持たれた一般の方々が多数参加され，会場は満席となりました。初めに，奥谷氏より『松枯れの現状を冷静にとらえ，どこにどのような問題があって松枯れが拡大しているのかを充分討論してみたい』との主旨説明後，いろいろな角度から松枯れをとらえるという事でまず，植生から見た松林（広島大学　安田氏）松材利用の現状（猪名川町森林組合，下岡氏）の講演があり午前を終了。午後からは，映画「松くい虫のなぞ」に続いて，松枯れの原因及び現状（林業試験場関西支場，小林氏）殺虫剤の残留性（住友化学宝塚研究所宮本氏）松枯れ対策現場からの問題（神戸市公園緑地部林氏）の順で午後の講演を終了し，総合討論においては活発な質疑応答が続き，現在使用されている防除方法だけでなく，いろいろな方法で松枯れ防除を考え，市民団体の協力を得，あらゆる立場の人々とみんなで松枯れを防ごうという賛同を得，シンポジウムを終了しました。

2．昭和55年度助成研究決定（研究調査委員会）

7月7日午後4時より事務所にて研究調査委員会を開き，次の2件に助成することを決定しました。

研究テーマ　ヨシ帯の生物群集学的意義と保全に関する研究

代表者　須川　恒　助成金額　27万円

推薦理由　本研究はヨシ原を生物の側から評価することによりヨシ原の重要性を生態学的に明らかにしようとするものである。これまで鳥類についてのヨシ原の換羽地・渡りの集結地・就時地としての意義やネズミ類やササラダニ類などのHabitatとしての価値を明らかにしようとした試みはほとんどなされていない。本研究をもとにヨシ原の生物群集学的意義を明らかにするとともに，このような貴重な場としてのヨシ帯の保護を強く建設省などに働きかけることにより，ヨシ帯の保全ないし自然環境保全の一助としようとするものである。

研究テーマ　ヒバリの棲息状況からみた府下自然破壊度調査

代表者　酒井　健　助成金額　13万円

推薦理由　ヒバリの棲息地は比較的人家に近く，またそのさえずりはよく人々にしたしまれている。この意味でヒバリの棲息状況に関する情報は入手容易と予想される。すでに府下野鳥の会会員を含め，1,000通に近いアンケートを郵送済みである。ヒバリの棲息地は主として田畑や草丈の低い草原（近年急速に進行してきた宅地開発の犠牲となってきた地域）ときに芝などをはりつけたのり面等である。そこで，ヒバリを自然環境の変化をとらえる生物指標の一つと考え，その棲息状況を把握することによって府下の自然破壊度を調査することにした。また5年毎に実施しているタンポポによる自然破壊度調査の結果と合わせ，府下における自然環境の変化（自然破壊状況）を立体的に把握してみたいと考えている。なお，ヒバリを生物指標としてとりあげ自然度を調査するという試みは少くとも我国における先例はない。

3．基礎研究について

上記の研究調査会においては，助成金決定と共に関西自然保護機構事業計画に従って55年度は次の3件について基礎研究をすすめることを決定しました。

研究テーマ　イワメの生態調査

代表者　名越　誠　研究金額　15万円

研究テーマ　貴重群落の評価基準の作成に関する基礎研究

代表者　菅沼　孝之　研究金額　15万円

研究テーマ　兵庫県の河口付近の植物調査。

代表者　福岡　誠行　研究金額　15万円

4．研究助成ナンバーの新設について

研究調査委員会では今までの助成研究に助成ナンバーをつけることになりました。今までの助成ナンバーは下記のとおりです。

No 1，賀茂川・鴨川の環境構造と動物群集

No 2，びわ湖を素材とする環境教育の計画と実践

No 3，大阪芥川における底生生物の経年変化

No 4，日高川の生物相調査

No 5，ヒバリの棲息状況からみた府下自然破壊度調査

No 6，ヨシ帯の生物群集学的意義と保全に関する研究

5．図書寄贈について

下記の図書を御寄贈いただき，誠にありがとうございました。

姫路市立水族館の内田至先生より

インドネシア・マレーシアのタイマイに関する調査報告書（1979年）　長崎べっ甲商工協同組合発行

愛知大学の山下善平先生より

神宮境内地昆虫調査報告書（1980年）　神宮司庁発行

6．総務委員会からのお願い

54・55年度会費(年5,000円)未納の方は，おそれいりますが郵便振替用紙御利用の上お送り下さいますようお願いします。

会報No. 5の訂正

5P図6，7，8，9．	東海道線→国道2号線 国道2号線→東海道線
23P初め	財団法人→社団法人
右4行目	しの課題→この課題
左17行目	理在→現在
25P右2行目	27.659→27,659
左13.17行目	青見山→青貝山
29P左21行目	裏失→喪失

関西自然保護機構会報　No.6

編集発行人　関西自然保護機構

編集委員　千地万造・石田志朗・渡辺弘之・佐藤治雄・堀　道雄・布谷知夫・山西良平

大阪市北区西天満4丁目10－7　書協ビル内　電話06－364－2422　郵便番号530　振替口座・大阪16679